

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 桑江 暢也
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル

8階 (〒100-0011)

電話 (03) 3503-3829

FAX (03) 3503-3828

<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.38 No.6

2014.12.1

会報 (通巻 228 号)

日本新聞製作技術懇話会

会 報 (隔月刊)

(禁転載)



目次

CONPT-TOUR2014 の足跡	3
朝日新聞社 製作本部生産管理部技師	金沢 俊彦 4
朝日新聞社 製作本部システム部コントローラ	長谷 博史 5
共同通信社 経営企画室委員	黒澤 勇 5
(株)静岡新聞総合印刷 代表取締役社長	増田 晴樹 6
信濃毎日新聞社 技術局次長	藤森 秀彦 7
日本経済新聞社 専務取締役製作・情報技術担当	木舟 一郎 8
(株)日経首都圏印刷 製作統括部部长	岩川 勇人 9
(株)日経東京製作センター 総務部部长	桐生 好信 10
読売新聞東京本社 制作局技術二部次長	堀古 貴志 11
日本新聞協会 編集制作部デジタルメディア担当副主管	阿部 圭介 12
(株)KKS システム制御部部长	小林 晋 13
サカタインクス(株) 新聞事業部東京営業部長	黒崎 彰夫 14
サカタインクス(株) 九州支店営業部	竹中 慶 15
第一工業(株) 名古屋支店搬送システム部部长	原 康章 16
DIC グラフィックス(株) 新聞インキ事業部東京新聞営業部主任	小野 莊嗣 17
(株)東京機械製作所 第一事業部国内販売グループ営業部長	青木 宏始 18
(株)東京機械製作所 第二事業部海外販売グループ主任	北井 大樹 19
東洋インキ(株) インキ営業本部副本部長	藤田 一浩 20
日本アグファ・ゲバルト(株) グラフィックシステム事業部新聞営業本部新聞営業部部长	佐藤 克英 21
富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ(株) 新聞営業部部长	下平 泰生 22
三菱重工印刷紙工機械(株) 営業本部営業統括部印刷機械営業グループ長	宮本 泰志 23
写真に見るツアー点描	24
World Publishing Expo 2014 見学記 (有)メディアテクノス 代表取締役	井上 秋男 25
新局長に就任して	信濃毎日新聞社 印刷局長
	宮沢 秀紀 29
楽事万歳	共同通信社 常務理事
	小野江 公利 30
わが職場あれこれ	東奥日報社 システム局システム部長
	加福 孝 31
	(株)日経東京製作センター 製作技術部長
	加茂 信喜 31
第114回技術懇談会記	32
新聞大会開く	32
会員消息他	32

●表紙写真提供：「CONPT TOUR 2014 入選作より」

(株)日経東京製作センター・桐生好信氏

「グラランドゼロ」

●表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター

●組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター

CONPT TOUR2014の足跡

～7年ぶりに米国新聞事情を見る～

7年ぶりに米国の新聞製作事情を視察する第39回CONPT-TOURは、9月25日(木)朝成田を出発、8泊6日の日程を無事消化し10月2日(木)夕帰国しました。久しぶりの米国訪問と、デジタル印刷の実際を見聞する旅行に期待が集まり、参加者は予想を大幅に超える37名(事務局、添乗員を含めると総勢41名)に。例年に比べて新聞社首脳が多かったのが今回の特徴です。

*

時差の関係で一行は出発日そのままの9月25日午前にNY入りしました。13時間弱の長いフライトの後とあって、この日の到着後は自由行動。翌26日午前から、NYデイリーニューズ社のジャーシーシティ工場を皮切りに視察ラッシュが始まりました。次いで午後はNYタイムズ本社と工場を訪問。同社は紙とデジタルの融合が進んでおり、多くの人が見学を期待していましたが、入館人数を12人に制限したいとのタイムズ側の要請がありました。結局見学はほぼ新聞社関係者の12人だけとなり残念でした。残る25人は市内にある同社カレッジポイント工場見学となりました。デイリーニューズ、タイムズ工場とも日本ではまれに見る巨大工場。後日訪問したシカゴトリビューン工場も同様、自紙のほか多量の新聞・印刷物を受託印刷し、重厚長大設備を生かした増収を図っていました。

*

27日はNYからシカゴに飛ぶ日でしたが、ヒヤリとするアクシデントがありました。前日シカゴ・オマハ空港の管制塔で放火事件が発生、同地への多くの便がキャンセルとなり、果たして移動できるのかという状況。到着後すぐにシカゴトリビューン工場訪問の予定が

入っています。土曜日の見学を強いてお願いした手前、キャンセルや大遅刻は許されません。一行に運があって、シカゴに無事飛べ、遅刻も30分程度で済んだのは幸いでした。

翌28日日曜はGRAPH EXPOの開幕。見学を前に米新聞製作技術界の専門家Hinderliter氏から、セミナーを受けました。EXPO会場は新聞製作分野(特に中流・下流)の展示が少なく、物足りなさを感じたとの声もありました。例の空港トラブルでシカゴに入れなかった展示関係者や見学者があったという話も聞き、初日の会場はやや人が少ない印象でした。

シカゴ市内には、デジタル印刷で新聞印刷を受託するTopweb社があります。番外として見学希望を募ったところ全員が希望。多品種少量媒体印刷のビジネスモデルを見に出掛けました。東機JET LEADER1500によるセクション折り込み印刷を初めて見せてもらいました。

*

最後の視察はホノルルでハワイ報知社(静岡新聞グループ)でのデジタル印刷見学です。早朝4時起床で5時からの朝日、日経の国際版印刷の現場に立ち会いました。今回の目玉とあって、丁寧な説明と活発な質問で双方とも終始熱心でした。同行した静岡新聞大石社長をはじめ関係者の皆様に改めてお礼を申し上げます。加えて、ツアーを円滑に導いた桑江団長、青木、林両副団長、研修会講師の黒澤、岩川、林、増田の4氏および幹事役の下平、竹中、岸本の3氏にも誌上を借りて感謝します。

ツアー同窓会の名称は「ジーター会」。一行NY入り当日、ヤンキース・ジーター選手が引退試合で奇跡的な活躍を見せたことに因むものです。
(事務局)

日本とアメリカの新聞はそれぞれに進化

朝日新聞社
生産管理部技師

金沢 俊彦

「ここがグランドゼロか」ニューヨークにある9.11メモリアルミュージアムを訪れた。2001年9月11日、現地の中継をテレビで見っていた。旅客機がワールドトレードセンタービルに突っ込み、その後ビルは崩壊した。つい最近の出来事のようなのであるが、既に13年が経過していた。

ミュージアムに保存された当時の資料を見て、マンハッタンのオフィス街で起きたテロ事件にあらためて怒りがこみ上げた。2749人の犠牲者に心からご冥福をお祈りする。



9.11メモリアルミュージアムのパネルから

*

ツアーでは驚きと興奮の連続だった。ニューヨークについた矢先にハンバーガーをほおばり、夕食のほとんどで肉を食した。ニューヨークではメトロポリタンミュージアム、タイムズスクエア、シティフィールドスタジアム、シカゴではミシガン湖、マクドナルド1号店、シアーズタワー、ホノルルではワイキキビーチ、全米で1番と名高いカイルアビーチに立ち寄った。見る物全てが新鮮であり、記憶に残るものばかりであった。

*



肉！

視察したオフセット印刷工場では、広大な建物内に1セット10～12ユニットの輪転機が複数セット設置されている規模に圧倒され、インサータと先刷りされた巨大なロールが立ち並ぶ発送場に驚いた。

視察で感じたことは、日本の宅配制度の素晴らしさである。しかし、新聞業界全体が部数減少している中、アメリカのように宅配に頼らない新聞を考える時期がくると思った。その時は、アメリカの生産設備の構成が参考になるだろう。紙面品質へのこだわりは間違いなく日本の方が上であるが、アメリカの新聞はおおよそ基準内の品質で良とし、独自のカット長、多セクションやステッチなどフィニッシュ（新聞の形）にこだわりと自由を感じた。日本とアメリカの新聞はそれぞれの事情により、独自の道を進化させてきたのだ。

*

一方、今回のツアーの目玉であったデジタル印刷はまだまだ発展途上であると思った。そもそも新聞は輪転機で多部数を印刷するのが従来の考え方であり、最近登場したデジタル印刷機は際物扱いだった。しかし、印刷機が輪転機だろうがデジタル機だろうが出来上がるものが新聞であれば、新聞印刷機である。各社のニーズに合わせて印刷機を選択する、または使い分ける時代が直ぐそこまできているようだ。とにかく注目される印刷機であることは確かであるので、ビジネスモデルが成り立つのか今後も注視していきたい。

*

短い期間ではあったが、日本という枠組みの中で凝り固まった思考を壊すには十分な時間だった。今後広い視野で新聞に付加価値をつけることを考えていきたい。

最後に、同行させていただいたの方々のおかげで楽しく過ごすことができました。皆様にお礼申し上げます。

さよならジーター

朝日新聞社

製作本部システム部コントローラ

長谷 博史

上司から行かないか？と言われ、今回のCONPT-TOURの行き先も内容も確かめずに、二つ返事でOKしました。海外の視察出張なんて断るという選択肢はありませんでした。ところが、視察の内容は印刷工場中心と分かり、不安になりました。普段は写真販売サイトの構築をしている私、最近では印刷工場に行ったことはありません。さらに参加メンバーのみなさまのご役職(社長、部長…)を拝見して青ざめ、そして行き先にハワイがあることは、なるべく言わないように……。

アメリカは銃社会の怖い国という印象があり、プライベートの旅行先として敬遠していました。これまでの滞在先はアジア・ヨーロッパが中心でした。今回もイスラム国がらみのテロに怯えながら、ニューヨークに降り立ちました。

ニューヨークの摩天楼、東京のビル群とは規模がずいぶん違いました。そして、9.11の悲しい現場……。その横に建つ新しいWTCには、不屈の精神を感じました。



9.11メモリアル横にそびえる新WTC

*

今ツアーの同窓会名である「ジーター会」の由来となったニューヨーク・ヤンキース、ジーターの劇的なサヨナラヒットの翌夜、メッ



ツの消化試合を観戦しました。

そこには弱いチームにもやさしい、野球を愛する人々がいました。

*

さて、視察した工場では、新聞印刷部数減の対策として、さまざま媒体の受託、デジタル印刷機の導入などの試みを見ることができました。また、インサート用の取り置き印刷物が大量に置いてあった発送フロアも印象に残りました。こちらの部数も維持していかなくてはなりません。

週末だけの購読契約や、さらには広告しかないなどというニーズもあるなか、デジタル印刷機がどのように普及していくのか、興味があるところです。

最後に皆様方、視察旅行中の数々のご無礼をお許しいただけると幸いです。また、最終日の研修会で発表された方々、飛行機での移動中もレポートを作成されていたこととされます。大変感謝しております。今後とも、「ジーター会」の一員として、末永きお付き合いをお願いします。

デジタル印刷機実用への第一歩

共同通信社 経営企画室

黒澤 勇

今回のツアーは移動総距離25,000kmで、過去のツアーでも5本の指に入るくらいではなかったかと思う。その中で無事にツアーを終了できたのは参加者全員による協力の賜ではなかったかと思う。

最初に訪れたニューヨークでは小雨が降る天気でしたが、国連総会が開催されるなどニューヨークの街は世界でも一番注目を浴びている都市だった時にそこにいらただけでも有意義だったと振り返る。

デイリーニューズ印刷工場から始まり二手に分かれたニューヨークタイムズ社の視察と今までとは勝手の違った視察だったが、各視察による成果はあったと思う。その後シカゴに移動にはシカゴでの空港事件がありスケジュールに不安が走りましたが、事務局、JTBの努力の結果無事移動が完了。



＊

シカゴではツアーとしては久しぶりに訪問したシカゴトリビューン印刷工場。過去の歴史から新たな取り組みなどから米国の新聞事情が垣間見えた感じがする。その中トップウェブ社による新しい取り組みには未来を感じられずにはいられなかった。2008年の「デジタル印刷機DRUPA」と言われた時から6年が経った今日の前でTKSのジェットリーダー1500が新聞印刷をしているのを目のあたりに見て感動を覚えた。それを裏付けるような「GRAPH EXPO2014」の視察だった。デジタル印刷機の印刷速度は毎年技術更新により徐々に上がってきている。しかし、今回のEXPOではあまり新しい技術の展示はなかった。小さい部分での取り組みはいろいろとあったことで大きな革新から実例の時代に入ったと感じたEXPOだったのではないかと思います。その中でのトップウェブ社の実用はデジタル印刷機市場において大きな一歩ではないかと感慨深い。



ホノルルでは一転として気候が温暖になった分、ツアー参加者としては疲れが癒えたのではないかと思っただけくらい気候がよかった。その中でのハワイ報知新聞社の訪問は早朝からの視察で、朝日新聞、日経新聞をこれもまたTKSのジェットリーダー1500で目の前で印刷を見ることができ実用の第一歩を示したと感じた。あと数年後には半導体技術向上により、この印刷方法がデジタル印刷ビジネスでの主流になるのではないかと感じた。

今回のツアーでは、ご一緒させていただきました皆様にはこの場を借りて感謝したい。

最後にツアー参加の皆様にありがとうございました。

なんだ！印刷会社じゃないか

株静岡新聞総合印刷
代表取締役社長

増田 晴樹

CONPT-TOURへの参加は、実に30年ぶり。その頃は、アメリカのANPA展示会を視察するのが主目的で、丸2日間アトランタの会場を這いずり回ったのを覚えている。

今回のツアーでは、ハワイ報知視察でのホスト役も目的の一つだ。前回のツアーでもハワイに寄ったが、共通しているのは研修会が1回あったことだけ。朝4時起きで、ハワイ報知を視察し、朝食後オアフ島視察、午後は研修会、夜はお別れパーティーと典型的弾丸ツアーの今回に比べ、当時はマウイ島にゆった

り2泊3日だった。

＊

前回もニューヨーク・タイムズに寄ったが、ビルの場所も変わり、玄関もNEWYORK TIMESと大きく書かれたかつての2枚のスイングドアではなかった。ビルの47%は、いつでも買い戻せるというオプション付きとはいえ、売却されており、その玄関周りでNYTの存在に何となく活気がないと感じるのは、やたらと厳しいセキュリティのせいばかりではなさそうだ。

さてNYには、もう1社、NYデリーニューズがある。部数の減少に伴い9セットあったゴス機を売却、09年にオールカラータブ120頁が可能なKBA6×2機3セットに更新。平日発行部数は、印刷版「タブロイド49万」（電子版15万）だ。これを夜間2セットで印刷。余力で、100種類以上の新聞(写真)を受託印刷している。白色度の高い紙や商印用のヒートセットインキやUVインキも一部の印刷で使用している。早速、少部数分野のビジネスチャンスを目指してあるメーカーさんが売り込みを開始していた。

シカゴ・トリビューン・フリーダム・センターは、北米最大の印刷工場で、900人以上の従業員が働いており、12セット設置可能な広大な工場に、現在は10セットの輪転機を設備。1日の印刷部数は250万部を超えるが、シカゴ・トリビューン紙は、この内36万部(デジタル版4.7万部)にすぎない。過剰になった印刷設備で、トリビューン紙の他に、WSJ、NYT、ライバル紙のシカゴ・サンタイムズなど18紙を受託印刷して収益を支えている。

＊

NYデリーニューズ、シカゴ・トリビューン両社とも米国の伝統的な広大な紙庫とホッパー式やドラム式のインサータとプレブプリントの保管場所備えた広大なメール・ルーム(発送室)を持ち、かつての全盛期の印刷工場と見た目は変わらない。だが、印刷物の内容は



自社物以外が殆どを占め、まさに受託印刷工場となっていた。日本でも受委託の流れが話題になって久しいが、日本よりも部数、広告収入の減少が激しい米国の有力な新聞社ではこの流れが完全に

定着しているようだ。また、一部では、UVインキやこれまで米国の新聞社では行われてこなかった品質管理などを取り入れて、通常、商業印刷で行われる1シート印刷ではなく、雑誌カタログ的な複数シートの商業印刷分野に進出する傾向が伺われた。

米国新聞社生き残りへの下流部門の当面の回答は、「印刷会社化」のようだ。

新聞を求めて歩く

信濃毎日新聞社 技術局次長

藤森 秀彦

午前6時を回っても、窓の外は暗かった。フライトによる時差のためか、午前1時を過ぎたころから何度も目を覚ました。そのたびに窓際に立っては外の景色を眺めた。ここはニューヨークのブルックリン区。高層ビルが並ぶマンハッタン区とは随分と雰囲気が違う。通りに面した建物の多くは高くても4階建て。その分、人々の普段の暮らしがあるように感じた。

ホテルの朝食はビュッフェ形式。皿に取ったパンやソーセージを食べ、オレンジジュースを飲むと、散歩に出掛けた。昼間は気温が上がりそうだが、街にはまだ爽やかな空気が広がっていた。

旅で訪れた街はできるだけ歩くことにしている。今回のCONPTツアーの日程を手にし

た時、どうやって散歩の時間をつくろうか—と考えた。昼間は日程が詰まっている。そこで朝の散歩を選んだ。

＊

宿泊したホテルはブルックリン区ゴワナスにある。東方のパークスロープの7番街に加え、近ごろは5番街に活気があるという。「それなら5番街まで行こう」。ホテル北側の交差点を右に折れて東へ向かう。前日のフライトの疲れがどっしりと体の中にたまっている。標高3600^{フィート}余の中国チベット自治区のラサを訪れた時のような感覚だ。

倉庫のシャッターを開けて仕事の準備をする人、勤め先へ向かうのか足早に通り過ぎる人。いつもの一日が始まったのだろう。れんが造りの建物の前ではリス2匹が姿を見せた。大きなしっぽがかわいらしい。カメラに手を伸ばしたが間に合わなかった。500^{フィート}ほど歩いて5番街に着くと、通りを南へ下った。

カフェやコインランドリーを通り過ぎた所にお目当ての物があった。売店だ。中へ入る



新聞3紙を購入したニューヨーク・ブルックリン区パークスロープの売店

と店の人がハンバーガーの肉を焼いている。中年の男性客が店の人と雑談をしながら焼き上がるのを待っていた。私の目的の品は新聞。店に入ってすぐの所に専用の棚があった。ツアーで本社を訪れるニューヨーク・タイムズ紙や、ニューヨーク・ポスト紙など6種類。

ニューヨーク・タイムズ紙などは1面で、

今季限りで引退する米大リーグ・ヤンキースの主将ジーター選手が本拠地最終戦でサヨナラ打を放ったことを報じていた。メキシコ系の新聞の1面にはサッカー日本代表監督のアギーレ氏の大きな写真が載っていた。暮らしに新聞が溶け込んでいるように感じ、なぜかほっとした。3紙を購入してホテルに戻った。

＊

シカゴの中心部を散歩して見つけたのは、12種類の新聞を収めることができる箱型の販売機だった。ホノルル国際空港の売店の新聞コーナーは大きなスペースが確保されていた。発行部数が減っているという米国でも、新聞が頑張っているように感じた。シカゴへのフライトで訪れたニューアーク国際空港では、目の前に座った青年が1時間近くじっと新聞を読んでいた。ただ、8日間のツアーを振り返ると、新聞を広げる姿を目にする機会は少なかったように思う。

新鮮だったアメリカ視察

日本経済新聞社

専務取締役製作・情報技術担当

木舟 一郎

23年ぶりのアメリカ。ブラックマンデーの直前に赴任し、シカゴ、ニューヨークと4年間の特派員暮らしを送って以来のアメリカでした。

当時は日本企業がロックフェラーセンターをはじめ、摩天楼を次々と買収していた時代。ワイン強盗やケチャップ強盗が横行し、拳銃を突きつけられた同僚もあり、治安是最悪。しかも、アメリカ国内の対日感情が極めて悪かった時期でした。

その後、ニューヨークには検事出身のジュリアーニ市長が、シカゴではデイリー市長が治安回復に努めたため、随分変わったとは聞いていましたが、直に自分の目で見て、確かにアメリカは当時とは一変していました。ツアー

一の仲間の若い人たちに誘われて、当時はめったに使わなかった地下鉄に乗っても、街中を歩いても、全く怖い思いはしませんでした。

変わったのは治安だけではありません。この間、アメリカの新聞業界も大きく変わっていました。

各紙が部数の増加を狙って拡大路線をまい進した姿勢は見られず、生き残りをかけて必死にもがいている状況。日本よりいち早く淘汰の時代に入っていました。

＊

そんななかで、感じたのはアメリカの新聞業界の志向する道が二極化していたことです。一つは電子新聞に傾斜、もう一つは印刷会社に傾斜していたことです。

第一の極の代表はニューヨークタイムズ。同社は今年春にこれまでのサービスに加えて、電子版の要約版を安い価格で、付加価値をつけたプレミアム版を高い価格でスタートさせて、読者ニーズにきめ細かく応える戦略に出ました。とくに、要約版は好評で、その理由を「若者には長い文章を読む『集中力がない』から」（同社マネージングディレクター）としていたことが印象的でした。

第二の路線をとっているのはシカゴトリビューンやニューヨークデーリーニューズです。トリビューン社は18紙の他社の新聞の印刷を受託、印刷専門会社の印象すらありました。またデーリーニューズ社は100種類もの媒体を印刷していましたが、それでも「輪転機の稼働率は50-60%」（同社バイスプレジデント）に留まっているとのことでした。

どちらの道をとったとしても、平坦な道ではありません。

＊

日本の新聞界は、消費税率の引き上げがあったにせよ、1年間で140万部も部数を落としている現状。日本の新聞社の進む道もアメリカの新聞社が模索する、この二つの道しかないのでしょうか。またこの二つの道をとれば、

新聞経営は成り立って行けるのでしょうか。

様々なことを考えさせられたアメリカ出張でした。

生き残りをかけた必死の経営努力

(株)日経首都圏印刷製作統括部部長

岩川 勇人

皆様大変お世話になりました。米国の新聞製作事情とデジタル印刷の実稼働をこの目で確認できたこともさることながら、ご一緒させていただいた皆様とお近づきになれたことが最大の収穫でした。

今回のツアーは入社して以来、海外出張は初めての経験となりました。自身としても、新婚旅行以来の海外渡航となり、米国は独身時代にグアムに行っていて以来で、米国本土は生まれて初めての経験でした。日付変更線をまたぐ旅行も初めてだったので、ツアー日程を最初に見た時に、ハワイから帰国する際の日程が間違っているのでは？と思ったほど。出発日に相当する日を2日分過ごすことで、帰りはほぼ1日分の空白の時空を飛び越えてしまうんですね。

そして、未来の新聞が届きました。これは、ニューヨークの夕方に日経電子版を見たところ、翌日付の朝刊がアップロードされていたことで感じた時差体験です。同じことはハワイ報知社でデジタル印刷による新聞印刷本番を見学させて頂いた際にも同様の現象が発生。情報は瞬時に世界を駆け巡っているということですね。

＊

意外と思ったのは、ニューヨークに居ても東京都内に居る感じとそれほど変わらないということでした。東京でも超高層ビルが増えて景観の迫力が増したことで、外国人が観光だけでなく、就労者が増えたこと。また、逆に米国に相当の数のアジア系の人々が居ることも要因でしょうか。

今回のツアーでは、デジタル印刷機による新聞印刷の実稼働とオフセット印刷の再評価という視点から見学をさせていただきました。

デジタル印刷機は既に目新しいものではなくなくなっていますが、新聞製作の業界ではオフセット印刷の置き換えという、単純なものではないことも分かってきています。単機の印刷速度はいずれオフセットに追い付くことがあるかもしれませんが、帳合工程を経るその構造的な「遅さ」をむしろ優位性に変えられる魅力(品質、設備や資材コストなど)が高まれば相当の普及もあるかもしれません。

オフセット印刷においては半裁・色間の物理的距離短縮といった小型化と商業印刷機のオートメーションの実装化、商業印刷へ融合化(UVインキなどとの併用)が今後のトレンドとして感じられました。一方、従来機器を改造して延命化し活用し続ける、設備投資ポイントの重点化、外部媒体の受注競争など生き残るため必至の経営努力も欠かせぬこととして改めて感じ取ることができました。

*

現地研修会の下流工程報告担当という少し荷が重い役回りでしたので、柄にもなくツアー中ずっと緊張しておりました。もう少し力が抜けていれば、色々な所でもっと良い仕事ができただろうかなどと思いつつ、ふと見上げたワイキキの夜空に見事な星空。初秋の星座がまだ暮れたばかりの早い時間に、しかも真夏のような暑さの中で。やはり、日本とは随分離れているところに来たんですね。

今後もジーター会の一員として末永くお付き合いのほどよろしくお願い致します。最後になりますが、このような貴重な経験と素晴らしい思い出ができたツアーの企画運営にご尽力された懇話会事務局に感謝申し上げます。

米紙印刷工場も紙低迷で様々に工夫

(株)日経東京製作センター 総務部長
桐生 好信

コンプトツアーに参加、9月25日—10月2日の日程で米国の新聞製作事情を視察した。新聞印刷に携わって間もない頃、ファイナンシャル・タイムズ(FT)紙の受信製版業務に携わる機会を得て、結果として現在もFT印刷の業務をこなしており、お蔭様で片言ながら、英語がなんとか身についた。今回、英会話を磨くよい折と胸躍らせてデイリーニュース、NYTカレッジポイント、シカゴ・トリビューンと新聞各社を回ったが、既視感も味わった。

3社に共通するのは、パルテノン神殿のように積み上げられた巻取り。24年前、英国のFT工場で見た紙庫と変わらぬ“威容”だった。土地の狭い日本は立体紙庫が主流で、給紙部の自動化が進むが、米国は輪転機こそ更新しているものの、給紙部は古く、印刷速度を上げれば供給が間に合いそうもない気がした。紙の新聞は苦戦とあって、各社とも給紙部を更新する発想はなく、延命が課題に。なお3工場ともCTP版は日本製だった。

*

工場内はやはり面白い。カレッジポイントで貼り出されていた損紙率は5%を超えていた。シカゴ・トリビューンの張り紙には「MUDA」のローマ文字。



トリビューン工場の現場の掲示板

続く文句は「Identification of waste is the first step to higher efficiency.」で、無駄の識別はより高い効率化への第一歩です、ということか。同工場では「Safety incentive plan」(安全誘導計画)も張り出されていた。無事故なら75ドルの報償とある。



トリビューンの印刷現場

日本では放置してもなくならないが。「労働者の意識、技術力、総じて紙面品質は日本の方が高い」とは、現地で暮らす日本人のコメントです。

もちろん欧米に学ぶべきものはある。アップル、マイクロソフト同様に、新聞業界でも電子の世界は欧米が先駆者。20年前の日本では、紙面データについて専用回線が主流だったが、FTは紙面データをインターネットでパケット送信していた。現在の電子版もまた然り。米新聞業界でも印刷版の収益性は悪化、デジタルにシフトしているが、いち早く転換して先行したせいか、NYTは有料デジタル購読者数の純増が既に鈍り始めているようだ。

＊

一方、生き残りをめざす紙の工場。シカゴ・トリビューンの印刷工場では、本紙のほか18の発行社と受託契約を結んでいた。欧米では以前から、競合する複数の新聞を同一印刷工場で印刷、このため多数のインサーターを常設、大きな梱包・発送場を備えている。日本では販売店制度が確立しているが、将来、部数と版制が減れば、複数の大手紙を同一工場

で印刷するような時代が来るのだろうか。ハワイ報知では複数の新聞を刷っていたが…。

ハワイ報知のTKS製デジタル印刷機はモノクロの日経新聞を1000部弱刷るのに38分要していたが、機械がスリム化し扱いやすくなれば工場である必要はない。それこそ販売店で刷ってもいいような話になり、未来の選択肢は一樣ではない。

全日程で飛行時間は31時間。全く内容を知らない『永遠のゼロ』を買い機中読書、最初の視察地はグランドゼロ(貿易センターへのテロは通称「カミカゼアタック」です)、最後の視察地の真珠湾で読み終えたのは、さて何かの因縁か。帰途は、放映中見ず終いの『半沢直樹』の時代劇みたいな誇張ドラマに嵌まり、ノンストップで1話から10話まで。有意義な視察機会を与えてくれた関係者の皆様に心より感謝。「倍返しだ!」は出来ないけれど。

この先に注目したい米国

読売新聞東京本社 制作局技術二部次長
堀古 貴志

米国へ足を踏み入れてまず感じたのは、この国の経済が勢いづいているということだ。なかでも訪問した地域が大都市だということもあり、町は活気に溢れていた。悲しいかな、新聞業界が苦境の崖っぷちにあることも目の当たりにした。

ニューヨークへ着いた初日、ツアーの面々による夕食会は、マンハッタンにあるアメリカンレストランのRosie O'Grady's。皆で和やかにビールやワインを嗜みながら、ゴム草鞋のようなステーキを頬張っていた。途中、店内に小さな歓声が上がった。壁の幾か所にあるテレビ画面に、ニューヨークヤンキースのジーター選手がプレーする姿が映っていた。この日は引退宣言した彼が、本拠地ヤンキースタジアムでの最終試合。我々の興味はもっぱら目の前にある料理や酒のあれこれ、これ

からのツアーの話題で盛り上がっていたのだけれど。

試合結果がジーター本人によるサヨナラ安打というドラマチックな幕切れで終わったのを知ったのは、酩酊状態でホテルに戻ってからだ。翌日視察したNYデイリーニュース社のジャーニーシティ工場では、当日付のタブロイド判デイリーニュース本紙に、1面と終面の見開きいっぱいにジーター選手が大写しとなっていた。



デイリーニュース見開き面のジーター選手

各紙メディアも大きく取り上げ、訪れてから最初の出来事だけに印象深く、今回のツアー愛称は彼の名をいただくことになった。

*

ハワイ訪問もデジタル印刷の本番工程による視察であることから、ツアーの目玉のひとつであった。視察の合間にバカンスの雰囲気味わってリフレッシュしようとの思惑があったが、ホノルル空港に着くと日本の夏のように蒸し暑い。ハワイは気温が高くても湿度が低いので快適だと聞いていたが、地元の人話によると、ここ数日は異常気象が続いているようだ。残念。

ハワイ報知社の視察は早朝4時半。外はすでに明るく、この時間なら気候も心地よい。ここハワイでは朝早くから働き始めて、昼過ぎには帰宅してのんびり過ごすというのがごく普通の働き方だという。うらやましいかぎりだ。その翌日、飲み明かした重い体で早起

きしてワイキキビーチに行ってみると、うら若き女性サーファーの姿が。心が洗われた。



*

ニューヨークタイムズ本社を視察した際に、机は並んでいるが無人のオフィスがあり、やけに人が少ないなと思っていたが、その数日後の本紙に、編集部署100人のリストラを発表する記事が出た。リストラの繰り返しである。今は耐えなくてはならない時期だろう。しかし米国は自ら生まれ変わるのが得意な国だ。視察で足を運んだ先々で、前を見据えるような眼差しで説明してくれた人たちの表情にそう感じた。

困難な道を進む

日本新聞協会

編集制作部デジタルメディア担当副主管

阿部 圭介

上司に呼ばれて「CONPT-TOURに行ってもらいたい」と告げられた。「技術・通信担当でもないのに、なぜ私が？」と疑問に思っていると、「ニューヨーク・タイムズ社の本社を視察し、デジタルメディアについても話を聞けるようだ」と説明があった。同社をめぐっては、社内レポート「Innovation」や、「NYT Now」「Times Premier」「NYT Opinion」といった新しいアプリ、購読形態が話題となっていた。日ごろ、メディア開発委員会を担当している私にとって、直接話を聞けるのはまたとない機会だ。その場で「参加させてください」と返事した。

しかし、視察の本旨は、アメリカの新聞製作事情だ。日ごろ縁がなかった技術関係の方々に同行する。自分に務まるだろうか。不安もあった。その点、結団式や視察中に声をかけていただいたり、渡航前から見どころをレクチャーしていただいたり、帰国前の研修会後にも不明な点を質問させていただいたり、みなさんには大変お世話になりました。ありがとうございました。

＊

ニューヨーク・タイムズ社では、施設・設備関係を担当する方と、国内製作部門の担当本部長の二人が説明役を務めてくださった。デジタル部門を直接担当している方から話を聞けなかったのは残念だが、これはこれでよかったとも感じている。というのも、ニュースとして伝わってくるのは、刺激的なリポートや先端的な取り組みが多い。それらが必ずしも受け入れられていないことに、じかに触れられたのは貴重な体験だったからだ。

メディア開発委員会専門部会で、紙の新聞製作・発行という既存事業がある中で、デジタルメディアという新規事業にどう取り組むかをテーマに講演を聴いた。一般論としても新規事業は困難な取り組みだという。紙が新聞社を支えている中で、若年層を読者として開拓するためにデジタルを武器にするのは、分かっているけど難しい。ニューヨーク・タイムズ社では、「NYT Now」がその役割を果たしていると説明があった。だが、「NYT Now」のために割く労力を回収するほどの収入には結びついていないという。

デジタル部門では先進社と見られているニューヨーク・タイムズ社でさえ、試行錯誤しながら模索している。この先、決して平坦な道ではないのだろう。とはいえ、深刻ぶっても騒ぐだけでは仕方がない。変化を楽しみつつ、乗り切っていくしかないと思った。

＊

もともと乗り物ではあまり寝つけず、今回

も機内では目がさえてしまった。時差のせいもあり、夕方早い時間からウトウトしてしまい、夜の“非公式な”情報交換の場にあまり参加できなかったのが心残りだった。付き合いが悪くて、申し訳ありませんでした。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

日本語のありがたさ

(株) KKS システム制御部部長

小林 晋

今回の視察での私のハプニングをまず紹介します。

成田から13時間かけてやっとニューヨークに着いた。窮屈だった姿勢から解放され、ターミナルに到着しいよいよ入国審査、ちょっと緊張しながら順番を待っていた。

自分が呼ばれパスポートを提示するとお決まりの質問が始まった。ここまではよかったが、指紋採取がうまくいかず、再度採り直し、女性審査官がじろじろと顔を見ている。ドキドキしながら手のひらを置きなおすと、審査官がジェスチャーを交え「ハード」と言っていたので、強く手を押し当てたが今度もNGで増々心配になってきた。

『俺は悪人ではないぞ』と心の中で叫びながら3度目の挑戦、読み取り結果が出るまでに時間がかかった。

しばらくして「OK」と返ってきた。

『ふーひと安心。さあー市内観光へ』

＊

市内観光を終え、全体夕食会に向かうバスではさすがに皆疲れ、メンバーのほとんどが居眠りしていた。私も気が付いたときは会場前にバスが到着していた。夕食会まで30分あり、有名なタイムズスクエアを見に行くメンバーに、ぼーっとした状態でついて行った。

タイムズスクエアのネオンに引き寄せられ、すたすたと歩いて行った。いつの間にかメンバーの姿が見えないことに気づき心細く

なり、戻ろうと思ったのが集合10分前。大して歩いてないから間に合うだろうと思いながら足早に戻った。

多分この店と思われる入口にメンバーは誰もいない。集合時間1分前。『店の名前はなんだっけ、わからない』心臓は高鳴り、『やばい、でもこの店だったな』と中に入り、左右を見回したがメンバーはおらず、いよいよパニック状態。『えーどうすりゃいいんだ』とあわてながら店を出、もう少し先へ行ってみる。通りの番号は54St。『こんな所に来てないな、確か52Stだったな』とつぶやきながら、今日ガイドさんが「通りの番号を覚えていれば迷わない」と言ったことを思い出したが、後の祭り。『どうしよう、迷子?』

もう一度さっきの店に戻り、ウインド越しに中を覗き込むも見えない。中に入り、今度はウエイトレスが出てきたので、勇気を振り絞って単語を並べて聞いてみた。

すると右を指差され、その方に向かったらJTBのツアーガイドさんの顔が見えた。

『ああ、助かった!』

これだけの人数がいれば、誰かの後をついていけば何とかなるだろうと軽い気持ちがいけなかった。もう少し慎重に行動しておけばよかった。

反省し初日を終えた。

＊

2日目からは本来の自分に戻り(?)真剣に新聞社見学に参加した。印象に残った事は、アメリカの発送作業であった。

新聞束をパレットに並べ、それを丸ごとラップし、ラップしたパレットをトラックへ積み込む作業の大胆さに、新聞束の扱いが日本とこんなに違うのかと驚かされた。

また、発送場の設備も中入れ処理の機器が多く、見たことのない新聞を巻いたドラム、インサーターと呼ばれるファンのようなものが回転する装置。フィード装置が何列も並んでいた。同じ新聞を発送するのに日本と随分

違うと実感した。

他にも設備の違いなど、知ることができ勉強になった。そして見聞を広める良い機会であった。

最終日は、絵に描いたような美しいワイキキビーチ(写真)を散歩し、この風景をもう少し見ていたいと未練を残し帰路についた。



最後になりますが、初日から肝を冷やすこともあり、また、準備不足だったと反省するところは多々はありましたが、自分にとって実りある視察でした。参加できた事に大変感謝しています。参加された皆様には大変お世話になりました。

ありがとうございました。

ジーター会万歳

サカタインクス(株)
新聞事業部東京営業部長

黒崎 彰夫

今回米国新聞視察の拝命を受けて、初めてCONPT-TOURに参加しました。しかも米国大陸に渡るのも初めての経験でしたので、全てが初めてづくしでした。

TOUR出発の15日前の旅行説明会、及び出発当日の結団式において、徳永マネージャーから「2014CONPT-TOURは、弾丸ツアーなので体調管理の徹底をお願いします」とアドバイスを頂き、身が引き締まったのを思い出します。結局大きなトラブルも無く全員無事に帰国できた事が幸いでした。

＊

出発初日、一路ニューヨークを目指して約12時間半のフライトを経て、初めての米国に降りたちましたが現地はあいにく雨。ところが、たまたま当日はニューヨークヤンキース、ジーター選手のホームでの引退試合で、おそらくニューヨーク中が盛り上がっている中、なんと試合前に雨は上がり、ジーター選手が大活躍した神がかり的な瞬間を共有できたのです。この経験から今年のツアー名が「ジーター会」になった理由について理解頂けるのではないのでしょうか。

結局以降の日程においては天気にも恵まれてツアーを過ごす事ができて幸いでした。ニューヨークではデイリー・ニュース社工場、ニューヨーク・タイムズ工場、シカゴではトップウェブ社、トリビューンフリーダムセンター、ホノルルではハワイ報知社を視察させて頂きました。日本と違い宅配システムも無い中、危機感を持って、部数減少を補うべく電子化だけでなく、印刷設備を更新、もしくはデジタル印刷機を導入、受託印刷を拡大して新たなビジネスモデルを構築しながら前進されている様子を垣間見まして大いに勇気を頂いた次第です。

＊

またGRAPH EXPOにおいてはデジタル印刷の波を実感しました。今回の展示会でデジタル印刷機メーカーの展示面積が最も大きく占めていました。ただ残念だったのは、デモで出力している印刷物が商業印刷関連のみであった事です。

今回約25,000キロを移動してきました。一番衝撃だったのは週末であった影響もありましたが、マンハッタンの活気でした。確かにシカゴも治安が良く活気も感じましたが、マンハッタンは群を抜いている感じでした。特筆すべきはリーマンショック直後においても、マンハッタンだけは全くこの影響も無く活気に満ちていたという事です。このエリアは絶えず活性化されており、全

く不景気とは関係ない特別なエリアなのかという感じでした。私達も更に頑張らねばと考えた次第です。

振り返るとあつという間の8日間でしたが、このツアーを通じて見聞を深める事ができて、更に視野が広がりました。またジーター会の皆様とツアーを過ごしてきた結果、懇親を深められた事が何よりもと得難い財産となりました。

改めてジーター会の皆様には大変お世話になりました。誠にありがとうございました。今後共ジーター会を通じてお付き合いのほど宜しくお願い申し上げます。

Culture

サカタインクス(株) 九州支店営業部

竹中 慶

初めての海外出張となるこの度のCONPTツアー、参加を言い渡された際は、私なんかに参加して良いのかと戸惑い悩んでしまいました。東京の上司から電話をもらうほど心配させてしまい、このままではいけない、なんとかなるといつもの前向きヘシフト。いざ出発、成田空港からニューヨークへ。心が高揚し過ぎて全く眠れずにニューヨークへ到着するほど楽しみになっていました。幹事の一人となっていた私は、初日から宿泊先の部屋で懇親会。初めは大勢だったなか、いつの間にか日付も変わり、気が付けば団長と二人きりで深夜まで談笑していました。

心配していた英会話は、片言の英語とジェスチャーでなんとか切り抜けました。聞けば、現地も色んな人の集まりで発音も様々。ネイティブでも聞き取れない事も多いとのこと。臆することは無いと、買い出しへ向かい強引な英語で懇親会消耗品を購入。店員の方は明らかに困惑した表情で、通じないなか困っている相手を見るのが忍びない気持ちになり、勿論拙い英語を話すのが恥ずかしいので

すが、これらが消極的にさせている事に気付きました。外国人の積極的な姿勢は日本には無いものがあるし、気にする所が違うんだろうなと思いました。買い物の包装もあまりこだわりの無い様子で、購入した品も袋に大雑把に入れて素早く手渡してくれます。食事においてはボリュームも豪快で、スイーツもこれまた豪快な甘さです。これら全てが特段嫌な感じはせず新鮮なところもあり、特に肉の旨味を感じる厚いアメリカンビーフにはハマリ、帰国後も自宅で焼いて食べています。また、日本の包装と奇麗なラッピングを眺めて満足感を得たり、繊細な日本食を楽しんだり、日本の文化や美徳、感性の違いを感じ、日本の良さも再認識しました。

＊

ニューヨークとシカゴでの印刷社の視察では、改めて厳しい状況を見せられました。減少し続ける広告収入と発行部数(特に印刷部数)、またデジタル配信への移行とそれらによる会社の取り組み。受託媒体数は既に多い印象でしたが今後更に増やすという姿勢と増やしていかなければならない状況。またGRAPHEXPOではデジタル印刷機と後加工機の展示が多く、やはり間口を広くするバリエーション化がキーとなっていました。課金の流れを工夫し構築しているが未だ完全ではないデジタル配信。講演では広告収入の回復への高品質の話もありましたが、むしろ合理的で良い意味で大雑把なアメリカで、そこを必要とされるのかなとも思いつつ、今後の動向が気になるところです。

危機感を覚えざるを得ない視察でしたが、前述した様な日本には固有の文化や感性があり、それらに海外とは違う見えないニーズもあるのだとも感じ、今のアメリカの新聞事情は楽観してはいけないが、あくまで音色の違う警鐘であると思いました。新聞は確固たるステータスがあり、社会だけではなく業界を牽引していく必要なもので、発行の形態は変

わっていくかも知れませんがこれからも存続していくものとも実感しました。勤め先はインキのメーカーですが種々の事業に関わり、これからも新聞業界の発展、繁栄に携わっていければ幸いと存じます。

最後に今回企画運営された方々、参加された方々に厚くお礼申し上げます。出発前は思い悩むほどでしたが、最終日が近づくにつれ、まだまだツアーしていたいと思う程でした。今後とも末長く宜しく願い申し上げます。

あつという間の8日間

第一工業(株)
名古屋支店搬送システム部部长

原 康章

今回CONPT-TOURへ参加の話を会社から聞かされたとき、海外へ行って大丈夫かな？が最初に浮かんできた感想でした。海外へは、30年前に新婚旅行で1回しか経験が無く、語学力は中学生以下しかないのに…。などと、不安な気持ちばかりが膨れ上がってきたことを思い出します。そんな気持ちで事前説明会へ参加したはずなのに、その後の懇親会が終わる頃には『何とかなるだろう』と、妙に開き直っている自分がいました。あれは、完全にアルコールの勢いに依るものだったと思っています。

名古屋へ帰ってツアーの準備を進め、いよいよ出発となり、成田からNYまで約13時間のフライト、ラッキーなことに3人掛けシートに二人、短い足を横まで伸ばしてもOK。機内食を食べ、飲んで、一眠りして、ビデオ鑑賞。まだまだ着かず…。

ようやくNY着、時差があるのもう一度25日の昼からスタート。到着後の昼食のハンバーガーの巨大さと、ケーキの甘さにはさすがにギブアップ。

午後、グラウンドゼロとメトロポリタン美術館を見学。9.11当時は福井県へ出張中で、

夕方のニュースのTV映像を、映画のワンシーンか、CMのCGかな？と思って見ていた場所に立っているかと思うと、少し変な気がしました。

*

翌日から工場視察スタート。ニューヨーク・デリー・ニューズ社ジャージーシティ工場では、輪転機の版替えの実演や、紙庫・給紙システムなどの説明を丁寧にして頂きましたが、私にとっては早く発送場へ行きたい気持ちもあって、半分以上右から左へと抜けていました。ところが、ようやく発送梱包室へ入れたと思ったら予定時間が近づき、その後は駆け足での見学となってしまい、非常に残念でありました。

ニューヨークタイムズのカレッジポイント工場では、丸梱をパレット積みしてラッピングを施しただけの発送方法にカルチャーショックを受けましたが、同時に日本で宅配されている新聞のクオリティの高さを再認識することとなりました。

*

シカゴ空港の管制塔トラブルがありましたが、何とかシカゴへ到着することが出来て一安心。シカゴトリビューンを見学後ホテルへ、夕食では米国らしさを求めて、ステーキに挑戦。美味しいとは思うものの、やっぱりデカイ!!

その日の夜、胸焼けで目が覚め、日本を発つときに、セントレア空港の売店で追加購入した胃薬のお世話になって再び就寝。翌朝には体調も回復しており、トップウェブ社の見学とGRAPH EXPOの視察へ向かう。

トップウェブ社と、後の訪問先であるハワイ報知社では、TKS社製JETLEADER 1500を視察する事ができ、噂話でしか知らなかった、デジタル印刷機の稼働状況を知れたことも大きな収穫でした。

3都市、各2泊ずつのスケジュールは、想像していたよりも短く、毎晩スーツケースを開

けては閉じての繰り返しだった気がします。ツアー最終日のさよならパーティーの席では、今回のツアー中に誕生日を迎えたという事で、TKSの青木さんと私の二人を盛大に祝って(いじって?)いただき、大変に思い出深い誕生日となりました。

終わってみれば慌ただしく過ごした8日間でしたが、ご同行いただいたジータ会の皆様には深く感謝を申し上げますと共に、今後とも末永いお付き合いをお願いいたします。

マンハッタンブリッジにたたずんで

DIC グラフィックス(株)
東京新聞営業部 主任

小野 莊嗣

1983年、私が陶酔する佐野元春がニューヨークに旅立つ。その31年後、曇天のJFK空港に降り立った。緊張の入国審査後にバスが向かったのは、「This IS U.S.A」を見事に表現するハリウッドレストランだった。巨大なハンバーガーと大量のポテトフライがワンプレートに鎮座。ナイフとフォークでかぶりつくが一向に減らない。あげくにデザートまでも超Big。出国前に「残す勇気を」との助言を頂いたのを思い出した。「食べ物は残さず」が私のモットーであるが、今ツアー中は健康の為に例外としよう。



巨大ハンバーガー

その後の観光では、グラウンドゼロを見学した。多くの観光客で賑わっていたが、あの

忌まわしい出来事を回想する人々の姿がそこにあった。二度と起きてはならぬと思い、皆に倣い合掌する。

バスはNY名物？の大渋滞を見事にすり抜け、マンハッタブリッジへ向かう。鉄道・自動車・徒歩で渡れ、チャイナタウンとダウンタウンを結ぶNYの象徴的な大きな橋だ。渋滞のおかげで遠方の自由の女神、眼下のイーストリバーが見える。周囲には幾重にも橋が架かり、海底トンネルも通じている。NYは島なのだと改めて思った。次回のはのんびりとたたずみ、歩いて渡りたい。

*

NYでは2つの工場を視察した。デイリーニューズ社では、商業印刷を受託できるように設備が充実していた。(スティッチ、ヒートセットインキ使用) ニューヨークタイムズ・カレッジポイント工場では、印刷物が床に散乱しており、踏みつけられている。私が担当する日本の新聞印刷工場では、皆が「一紙入魂」を掲げて働いている。とても悲しい気持ちになった。

シカゴでは湿度の関係なのか快適に過ごせた。町並みもとても綺麗で、夜の公園内の噴水が幻想的で、ツアーメンバーとの散策はすばらしい思い出となった。

視察したシカゴトリビュン社は10セットもある北米で一番大きな工場だ。8本の巻取りを吊り上げるクレーンは壮大そのものである。

GRAPH EXPOでは、HPのグーグルグラスを用いたデモが興味深かった。両手が使え、スマートフォンのようで、音声認識でインターネットにアクセス可能だ。(ドラゴンボールのスカウターのイメージ。)近い将来、日本でも採用されるのだろうか？

ツアー後半はハワイ報知社の視察だった。シカゴのトップウェブ社と同じく、TKSデジタル印刷機ジェットリーダーの実印刷を見学した。アメリカでは他民族コミュニティが

多く、小ロット印刷物の需要がある。デジタル印刷機にはうってつけの市場だ。

*

せっかくだからハワイの海にダイブ！したまでは良かったが、ルームキーを預けたつもりがチェックアウト扱いとなっており、砂まみれのまま廊下でホテル係員を待ったのも、今では良い思い出だ。

「ジーター会」と命名された今回のツアーに参加させて頂き、とても貴重な経験とすばらしい思い出を得ることが出来ました。皆様はこの場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

皆様との出会いに感謝

(株)東京機械製作所
第一事業部国内販売グループ営業部長
青木 宏始

私にとって初参加となるCONPT-TOUR2014が9月10日(水)の説明会(結団式)を皮切りにスタートしました。

今回のスケジュールは、移動時間2.5万km、機内移動時間は約30時間で3都市を駆け巡るという超弾丸ツアーでした。そんな中で参加者数は過去最大39名、副団長という大役も背負ってか時差ぼけや睡眠不足を感じてる時間も余裕もなくあっという間に8日間が過ぎ去って行ったまとまりの有る楽しいツアーでした。

参加者はいずれも各社の幹部級の方々ばかりでアフターファイブを中心に懇親を図ろうと思っていた小生は、普段なかなかお会い出来ない方々となんとか予定通りに交流出来た事を皆様にまず感謝申し上げます。

*

さて、米国新聞社製作を視察につきまして、ニューヨーク・デリー・ニューズ社、ニューヨーク・タイムズ社、シカゴ・トリビュン社、各社KBA機、GOSS機、MANROLAND機の使用など様々ですが、第一印象は

とにかく設備スペースが広大、オフセット輪転機及び周辺機器は機齢が進行している、そして従事する労働者が非常に多いと感じました。紙面品質や折調精度等に関しては、やはり日本国内新聞社の方が優れていると思ったのは大方、私だけではなかったのでしょうか。また、多くの新聞社でリストラを実施しているとの事でしたが、近年まで合理化を推進させないとの理由で外部視察者の見学を受け入れていなかったとの話を聞いて労働者数が多い理由もうなずけました。

各社デジタル関係に注力していく一方、ここ数年で広告収入が半減している実態も有り世界的にも我々を取り巻く環境はこれから益々厳しくなりつつあることを改めて実感致しました。

*

北米最大の印刷機材展、GRAPH EXPO2014は約400社が出展していましたが、総じてデジタル機器の展示に関しては、新聞印刷機器関係より、商業印刷機器関係ばかりが目立った印象が強く残りました。

そんな中で当社機、JETLEADER-1500が印刷技術を高く評価され米印刷技術団体(PIA)が主催する「InterTech Technology Award」を受賞する事になり、当社からも芝社長が授賞式に出席致しました。

日頃からの皆様のご支援、ご愛顧の賜物と改めて皆様に感謝申し上げます。

スケジュール後半は、当社機、JETLEADER-1500のユーザーで有ります「Topweb LLC」及び「ハワイ報知社」で視察研修を行なっただき、実際に日本国内大手の新聞印刷を行ないました。

新聞印刷の過程で紙面品質について普段あまりお付き合いのない上流システム関係者の方より送り出し側のデータに不具合が有ると教えていただき、日本国内より再度データを送信して頂けるとの情報が有りました。私たちメーカーの立場として、今までとはまた違

った観点でユーザーへの営業活動を推し進める必要が有ると感じ、今後の業務に活かして行きたいと思います。

*

以上、工場視察について色々感想を述べさせて頂きました。

その他にもシカゴでのブルース鑑賞やミシガン湖散策、ハワイでのBirtthday Party (私も対象者の1人)など心に残る思い出も沢山共有出来ました。今回団長を務められた桑江さんを先頭に、今後も熱い熱意と強い責任感を持った「ジーター会」の一員として杵を超え皆様と末長くお付き合い出来ます様よろしくお願い申し上げます。



思い出に残るBirthday Party

ニューヨーク・シカゴ・ハワイ

(株)東京機械製作所
第二事業部海外販売グループ主任

北井 大樹

今春まで米国の子会社に赴任していたこともあり、JETLEADERをご購入頂いたお客様への納入前後のサポートをさせて頂いたのが御縁で、今回のCONPTツアー参加の社命が下ったと自覚しましたが、いざCONPT初参加を告げられると内心は些かの隙もない程の緊張感に支配されました。少なくともハワイに浮かれている様子など、職場でも家庭でも一切表情に出したつもりはないのですが…。

「ニューヨーク・シカゴ・それからハワイへ」

渡航先を告げると、前述の思いとは裏腹に、「収穫」を期待する(嫉妬ともとれるような)と

でも温かい目で見送られました。

海外でのトラブルは付き物とはいえ、国連開催に伴うマンハッタンの大渋滞やシカゴ管制塔の火災によるフライト遅延などの予期せぬ事態も重なり、足早に移動を繰り返す過密な旅程となりました。今思えば、アメリカ到着初日に1時間足らずで”駆け抜けた”メトロポリタン美術館(世界三大美術館のひとつ)見学が、その先のツアー全容を物語っていたように思います。

そんな颯と流れる景色の中にも、ジーター(今回のツアー同窓会名)の劇的な引退試合に沸くニューヨーカーや、スタジアムの外まで熱気溢れるシカゴベアーズのファンにスポーツ文化が根付いたThe U.S.A.をしっかりと感じつつ、大盛りのランチプレートに疲れた胃袋を”日本酒”や”焼酎”で存分に労りながら、昼夜に渡って皆様とご一緒させていただいた時間は、とても多くのことを勉強させていただき、忘れ難い思い出になりました。



日経・木舟専務による印刷開始(ハワイ報知社)

アメリカならではのスケールの大きさを感じたオフ輪工場視察もさることながら、当社社員としてはやはりJETLEADER納入先を2箇所も見学頂いたことをとても光栄に思い、旅のハイライトに挙げさせていただきます。行き届かない点は多々あったかと思いますが、このような機会を頂戴し、ご理解頂いたCONPT関係者・ツアー参加者の皆様、見学に際し多大なご協力を頂いたハワイ報知社様・TOPWEB社にも、この場をお借りして

改めて御礼申し上げます。

旅の終わりが近づくホノルル空港の売店で、家族への土産という最後のピースがなんとか埋まり、今回のツアーを”豊作”と甘い自己採点をする一方で、帰国便で見た「半沢直樹」にも感化され、気付けば2年後に迫ったdrupa 2016に、メーカー各社はどのような展示を控えているのだろうかに興味と危機感を抱きながら、当社もより革新的な提案ができるよう努めていかねばと決意を新たにしました次第です。ツアー参加者の皆様には、引き続きのご支援・ご指導を賜りたく、今後も末長いお付き合いをお願い申し上げます。

デジタル機と40歳輪転機が同居

東洋インキ(株) インキ営業本部副本部長

藤田 一浩

2014年4月弊社では新聞インキ営業部が組織の変更にともない、インキ営業本部と一緒にになりました。今まで新聞業界の経験の無い私がTOURに参加させて頂くことになり、業界の方々との親睦が今回の目的でした。

ただ、TOURの行き先が「ニューヨーク」⇒「シカゴ」⇒「ホノルル」という報告をすると「アメリカ旅行」と会社内では呼ばれるようになっていました。

*

さて、TOURについてですが今回はやはりデジタルが最大の目玉で「JETLEADER」の運用実態があったと思います。

システムに関するコメントは出来ませんが、特に海外で自国の新聞が読めるというのは非常にありがたい事です。日本語に限らず今後拡大していく可能性を大に感じました。デジタルが紙と電子版に対して、どの様に進化していくのかますます興味深いところではありますが、インキメーカーとしては紙媒体に対する期待が大きいところです。

ハワイ報知でこの「JETLEADER」の隣の

部屋で活躍していたGOSS社製機械が記憶に残る印象的なものでした。昭和49年製なので40歳、心が温まる感じでまだまだ現役で頑張っている感じです。



GOSS社製印刷機 熱で原形を留めない
消防車

オプションツアーで印象的だったのが、ニューヨークの911メモリアルミュージアム。今年の5月に完成したばかりということもあったのでしょうか、大勢の見学者で賑わっていました。入り口では空港のようなセキュリティチェックがあり、熱で曲がった鉄筋や原形を留めない消防車などが展示され13年経った今でも当時の悲慘さが感じられます。

ニューヨークは、17世紀に当時の総督がこの地方の先住民から当時の物価に換算すると24ドルで買い取ったと言われています。ハドソン河口という交通の便の良さもあり経済の中心地として、資本主義の中心地として発展してきた都市です。そのシンボルである自由の女神が独立宣言100周年を記念してフランスから贈られた時に台座の資金が集まらなかったというのは今では想像もつかない話です。(余談ですが自由の女神は近くで見えたかったです。)そしてニューヨークだけでなくアメリカの資本主義と富のシンボリックな存在として貿易センタービルのツインタワーがテロリストたちの標的になってしまったのでしょうか。犠牲になった方々のご冥福をお祈りします。

最後に、今回のTOURに参加させて頂き皆様と一緒に出来たことに深く感謝申し上げます。「ジーター会」がその名のごとく勝負強く記憶に残る会と成りますように今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

感動の出会い

日本アグファ・ゲバルト(株)
グラフィックシステム事業部新聞営業本部
新聞営業部部長

佐藤 克英

インターネットを活用して何度と無く見ては心を癒していた。憧れの君は突然姿を現した。成田空港を出発してから5時間程たったのだろうか、窓の外に何かがぶつかるような音がした。「氷かな…」そっと窓の外を覗くと翼の彼方にそれは姿を現していた。

オーロラだ！ あの音はオーロラの出現を知らせるものだったのか、こんなところで出会うとは想像もしていなかった。

今はアラスカの上空。

更に数時間、アメリカ大陸・Sunrise！

(<http://aalive.net/> Liveオーロラ)。

＊

今回の視察地はニューヨーク、シカゴ、そしてハワイ。5工場の視察で各社が声を揃えていた事は「新聞印刷工場から印刷工場への変革」であった。

欧米の印刷工場では当たり前だが、しかしながら日本では見る事の出来ない折込みチラシやカタログを含む多様な印刷物を取込んだ工場経営、オフセット輪転機の立ち位置など伝統的な新聞印刷工場経営とインクジェット印刷機という実用化されてまだ新しい技術までを印刷技術の年表でも捲る様に見た経営改革の流れ。

その視察はまさに温故知新を思わせるものであった。5年後の事は判らないとよく言うが日本の新聞製作技術がどのように変化していくのか、経営と新聞製作技術の狭間で私たちが考えねばならないことは何かを問う大きな切掛けになった事は間違いない。

最終視察地のハワイ報知社でインクジェット印刷機から朝日新聞と日本経済新聞の2紙が印刷され製品となるところを見させて頂いた。

1983年はじめての海外出張で米国を訪れたとき届いた新聞には帯封が巻かれ航空便で届けられていた。そして、1984年頃から衛星通信による紙面電送に切り替わり現地印刷が開始された技術の変遷を知る一人としてインクジェット印刷機から新聞が出てくる様を感慨深く見させて頂いた。

海外紙面伝送は今回のTour2度目となる感動の出会いであった。

Tourは見た事に対する感想と未来を想像する機会、そして人脈形成の要素を兼ね備える重要な機会であった。出発前の不安から180° 変化した心境がCONPT-TOURの意義を物語っているのかも知れない。参加メンバーの皆様には大変お世話になりました。

デジタルとアナログ

富士フイルムグローバルグラフィックス
システムズ(株) 新聞営業部部長

下平 泰生

6月1日辞令。新聞営業部勤務で8年半ぶりに新聞業界にお世話になることになりました。

着任から新聞社、関連各社に駆け足でご挨拶に伺っている最中に「CONPT-TOURに参加せよ」との話がありもちろん快諾。14年ぶりにツアーに参加させていただくことになりました。以降、時間があると思っているとあれよあれよと時が過ぎ、あっという間のツアー説明会。その後用意をするまもなくツアーに突入のスタートでした。

実は前回の視察内容を思い出そうにもなかなか記憶が薄く、覚えているのは大概が夜の部の記憶ばかりで(苦笑)。

過去の経験を活かそうにもそんな記憶だけではと思っている矢先に、事務局から「幹事」ご指名のご連絡。「やっぱり夜の…」と思いつつ、もちろん快諾でお引き受けさせていただきました。

しかしながらツアー中、幹事が機能してい

たのか、ご不便おかけしたのではないかと反省をしているところです。

*

さて、今回の視察はなんと言ってもインクジェット。前職の部門では商業印刷を担当していましたが一般的には印刷会社にPOD機は当たり前前の時代。次はインクジェットをどのようなお客様に活用していただきどのような課題があるのかを深探りしていこうとしている状況の中、日本の新聞業界でどのように連帳インクジェットが活用できるのかヒントを見つけたいと「いざ渡米！」。

当初ツアーの予定になかったTopweb社に訪問した際の話。

その場である方の話、米国は多民族が集まる国で小さなコミュニティが各地方にたくさんある。そうすると小ロットの印刷物が民族の数だけ発生する。これはなるほどでした。

印刷物の代金云々は別にしてもそのようなコマーシャルペーパーが企画される土台はあった訳で単一民族の日本とは大きく状況が異なるわけです。日本ではさすがにこのモデルは通用しませんが考え方は応用できますので、日本の高い印刷技術を持って安い印刷単価に立ち向かうために、どのような付加価値をつけて紙媒体を中心に何を売っていくかアイデアを考えなければいけないと感じました。

NY、シカゴに続いて3ヶ所目の訪問地はハワイ。各地2日の滞在、移動で疲れは若干でたもののハワイは懐かしの新婚旅行以来。久しぶりの訪問に胸を躍らせ、やはりワイキキカラカウア通りへ。

皆様には内緒で裏通りの新婚時に行った店を探しに行ってみたりもしました(その店があったのはびっくりしました)

ハワイ報知社の見学は早朝夜が明けぬうちから出発。久しぶりの朝刊立会い始動式に立ち会ったような訪問となりました。ハワイの方は早朝から働くとのこと説明を受けましたが、当日は朝早くから視察受け入れのための

準備や手動で巻取りを変えていただくデモまでしていただき頭が下がる思いでした。現場の皆様にも改めて感謝いたします。

今回のツアーご参加の皆様との出会いに感謝し今後とも末永くお付き合いご指導をいただきたくよろしくお願いいたします。

失敗続きだった CONPT-TOUR 2014

三菱重工印刷紙工機械(株)
営業本部営業統括部
印刷機械営業グループ長

宮本 泰志

ある夏の日、私のCONPT-TOURは、突然やって来ました。「元々行く予定であった者の都合が悪くなったので、君が行って呉れないか。」全く予期していなかった事で「えっ、私が?」と思ったのを今でも覚えています。私の現業務は、2012年7月末に約3年間の香港駐在業務から帰国後、工場営業業務を担当しており、お客様からご注文をいただいた製品を間違いなくお客様へお届けする事を最大の仕事に、日々工場内の切り盛りに追われていたからです。しかし、会社生活の中で、輸出業務に20年近く携わって来た事もあり、久しぶりのアメリカ出張に気持ちが雄飛したのも恥ずかしながら事実でした。

しかし、今、改めて振り返ってみると、それは一言で言い表すと「失敗の連続」でした。過去の業務で海外出張を相当数経験し、正直なところ余裕を持ってツアーに参加出来ると考えていました。また、アメリカへ渡航するのは約15年ぶりでしたが、まあ何とかなんと高を括っていたところがありました。ところが現実には正反対で、そうは問屋が卸しませんでした。スタートの成田空港で、まず荷物の重量オーバーが判明。現地に着いたら皆さんと飲み交わそうと地元の特産品等、結構な量のおつまみを仕込んだのが裏目に出て、超過料金を支払うはめに。その後、出国前の壮行会で皆さんと乾杯!というタイミングで、

今度はビールを派手にこぼしてしまい、皆様にご迷惑を掛けてしまいました。その時、どうもいつもの海外出張と様子が違うなと感じましたが、これが今回の失敗続きのツアーのスタートでした。

その後は、空港でパスポートを無くしたと勘違いし探し回る、ツアーメンバーの皆さんを夕食へお誘いしましたが、地下鉄を乗り間違えて別の場所へ行ってしまう、更には道に迷い、ニューヨークやシカゴの街中で皆さんを右往左往させてしまう、折角のシーフード料理の予定がインド料理となってしまう等々、挙げたら切がない程の失敗続きで、冷や汗を掻く事しきりでした。

*

この様に、個人的には散々なツアーとなってしまう、お付き合いをいただいた皆様には本当にご迷惑をお掛けしてしまいましたが、ツアー自身は非常に有意義なものでした。同じ新聞業界に身を置く者として、アメリカの最新の新聞事情に様々に肌で触れる機会を得て、これからの仕事の中で考えるべきポイントを収穫する事が出来た事。また、ツアーメンバーと寝食を共にさせて貰い、仕事の枠を超えた様々なお付き合いが出来た事等、思い出は尽きないものがあります。特に、夕食後の有志が集まった「部屋飲み会」では、皆さんから様々なお話を伺い、心ゆくまで杯を交わさせていただきました。(団長殿に帰らせていただけない夜もありました。)只、最終日の部屋飲み会に、体調が思わしくなく参加出来なかった事が唯一の心残りです。

今回、初めてCONPT-TOURに参加をさせていただき、日常では得る事の出来ない沢山の得難い体験や友人を得る事が出来ました。これからは「ジーター会」でまた皆様と再会する事を楽しみに、今回の経験を日々の業務へ生かして行きたいと思います。お世話になった皆様、ご迷惑をお掛けした皆様、本当に有難うございました。



クリストファーベイカー氏
(信濃毎日新聞社・藤森秀彦氏)



新聞ボックス
(信濃毎日新聞社・藤森秀彦氏)



TOUR 思い出の1コマ

全員集合＝ハワイ報知にて



シカゴ Monroe Harborの朝
(サカタインクス・竹中慶氏)



ホノルル国際空港の新聞販売機で
(日本新聞協会・阿部圭介氏)

World Publishing Expo 2014見学記～次世代新聞技術の方向性を示す～

有限会社メディアテクノス代表取締役 井上秋男(日本印刷技術協会客員研究員)

はじめに

欧米で今年最後の展示会となるWAN-IFRA（世界新聞・ニュース発行者協会）主催の「第44回World Publishing Expo 2014（以下WPE14）」は、10月13日～15日の3日間、オランダ・アムステルダムで開かれた。

厳しい環境の中、出展社・来場者とも前回より減少したが、▼展示会はメディア変革期に対応した新製品・新ソリューションの出展増加▼メディアポートやカンファレンスは導入事例や課題解決、今後の展開などを数多く紹介▼全体的に次世代に向け新聞技術の新たな方向性や可能性を示し有意義な展示会となった。なお、今回は2015年10月5日から7日までドイツのハンブルグメッセで開催される。

開催状況

開催テーマは特に発表されていないが、パンフレットやホームページには「Publishing on all channels」が掲載された。開催場所はアムステルダムRAIエキシビション&コンベンションセンターの9,10,11の3ホールを使用。出展社は29か国225社（前回35か国267社）、来場者は100か国約7000人（同90か国約8500人）と発表された。メディアポートは展示会場内で「Revenue」「Content」「Power of Print」の3テーマで開かれ多数来場した。

カンファレンスは「第13回ニュース編集者



メディアポートの盛況

サミット」「第7回タブレット&アプリ サミット」「第1回世界印刷事業者フォーラム」が同時開催され、プレゼンと活発なディスカッションにより盛会となった。

全体トレンド&トピックス

▼開催規模の縮小続く：WAN-IFRAは、2012年に「IFRAEXPO」から「World Publishing Expo」に名称変更し、新聞製作技術展からモバイル、オンラインなど幅広く展開する「新聞ソリューション展」に移行した。その後も出展社、来場者の減少傾向に歯止めがかからず今回も規模縮小となった。背景として新聞不況による新規設備投資の減少やデジタルメディア展開含め紙に代わる新たな収益向上を実現するビジネスモデルがなかなか見つからないことが挙げられている。因みに開催規模は、2010年ハンブルグは出展社343、来場社10,169人、2011年ウィーンは同300社、約8,000人、2012年フランクフルトは同260社、約7,000人となっている。▼主催者は「成功」と総括：閉幕後、WAN-IFRAは「World Publishing Expo Closes on Successful Note」と総括した。おもに「出展社、来場者は前回より少し減少したが、最高責任者や意志決定者が高水準で維持」、「出展社の契約・商談活発化」「来場者から価値ある展示会、満足などのコメント」を紹介している。▼新製品・新ソリューションの出展相次ぐ：規模縮小にもかかわらず、主要ベンダーから革新的な製品・ソリューションの出展や発表が相次いだ。プリプレス部門では、普及拡大しているモバイルやソーシャルネットワークサービス(SNS)向けマルチプラットフォーム・マルチメディア展開を効率的に編集配信する「デジタル統合編集ソリューション」を紹介。プレス・ポス

トプレス部門では、「コンパクト輪転機、デジタル印刷機、高速CTP、付加価値発送システム」などが出展・紹介され注目を集めた。

▼**出展ベンダーの2極化**：他の展示会と同じく出展社・来場者減少にもかかわらず「大入りブース」と「不入りブース」の2極化が見られた。背景としてユーザーの「設備投資の集中と選択」とベンダー側の環境変化やニーズに対応した「新製品開発力」の差が見受けられた。▼**メディアポート盛況**：3か所のメディアポートは、新聞社の導入成功事例や課題解決とベンダーから最新ソリューションが数多く紹介され、盛況となった。特にベンチャー企業による提案、実演は、大手ベンダーには見られないユニークな取り組みとなり、「新聞メディアの可能性を上げた」など好評価となった。▼**ダイナミックな提携・連携進展**：新聞メディアとベンダーを取り巻く環境変化により、従来の枠組にとらわれない提携・連携が進展している。プリプレス大手のCCIヨーロッパは昨年11月にオンラインパブリッシングベンダーEscenicを買収し、合同出展によるWeb・モバイル編集配信の強化拡大を紹介した。2012年にDTIとSAXOTECの合併による新会社「NEWSCYCLE」は、2013年にAtexの広告部門、今年5月にはローカルメディアソリューションのMediaSpanのクラウド部門を相次いで買収し、新トータルソリューションを紹介した。プレス部門では印刷品質制御大手のQ.I.Presscontrollerが輪転機制御大手のEAEを買収し、共同開発した新製品を発表した。▼**世界印刷事業者フォーラムに注目集まる**：世界の新聞印刷事業者が一堂に集まり今回初めて開かれ、新聞印刷の課題、解決策、今後の取り組みについて幅広く講演と議論を交わした。講演者の一人としてTK-SJETLEADER1500を2台導入稼働し、世界的に注目を集めている米国Topweb社代表RODO k.WINSCOTT氏が「Digital newspaper printing in Chicago」と題して、取り組み

状況、顧客へのデジタル印刷ソリューション展開などを具体的に紹介し話題となった。

プリプレス部門の出展状況

■**編集製作ソリューション**：世界的にスマホ・タブレット端末によるモバイル化とSNSが急速に普及拡大し、新聞界も外部メディアとの本格的なエンゲージメントが必要となっている。WPE14では最新の新聞編集制作から、クラウド、モバイル・SNS対応の新製品や新ソリューションが主要ベンダーやベンチャー企業から一堂に紹介され大きなトレンドになった。▼**CCIヨーロッパ**は、統合編集制作ソリューションNewsGateの新バージョンの導入事例と買収したEscenicのモバイル・ビデオ対応のマルチチャンネル・パブリッシングを紹介した。また、支援している企業から話題のGoogle Glassを使用したウェアラブル端末ソリューションのテストや評価結果を示し、今後の可能性を紹介した。



ウェアラブル端末の紹介

▼**Eidosmedia**は、デジタルパブリッシングプラットフォームMethodの最新バージョンを紹介。「Method SWING」は、ジャーナリストとエディターが異なる場所でウェブベースの編集業務を連携して進行。「Method Social」は、SNS上に流れる大量データの中で関連記事を強力な「検索エンジン」で探し、分析・評価して編集業務に活用するソリューションを紹介。▼**NewsCycle**は、編集制作業務を4つのシーン（モバイルニュースルームとオーディエンス、編集プラン、マルチチャンネル

ニュースルーム、共有とゾーニング)別に実演し賑わった。▼Atexは、「Atex Content Suite」の最新バージョンをもとに「印刷、オンライン、スマホ、タブレット、放送」などのオールチャンネルへの最新ニュースや広告配信を紹介。モバイル展開として、昨年6月に提携したイタリアのモバイルソリューションベンダーApplix社の「ViewerPlus」を実演してスムーズな編集配信を紹介。▼ベンチャー企業は、電子版の作成から編集配信までのソリューションを実演。特にタブレット端末へ多彩な紙面イメージの配信や表示画面の最適化への取り組みが多く見られた。

■**広告業務処理**：新聞広告の取り巻く環境変化により広告業務処理も拡大し、主要ベンダーや広告ベンダーのLineup Systems、AdFlow、ppiMediaなどから「マルチチャンネル、CRM、財務管理、マルチメディア広告、広告予約のセルフサービス、クラウド化、サードパーティーソフト連携」などデジタルメディア時代の広告ソリューションを紹介した。

プレス部門の出展状況

■**CTP**：欧州では90年代後半から2000年代はじめに導入されたCTPの更新時期を迎え、主要ベンダーから最新機器が一斉に出展された。▼富士フイルムは、新製品Luxel News-VMAXセッターを実機出展し、400版/時の高速化と1200dpiの高品質化とバイオレットプレート Brillia PRO-VN による「lo-chem plate」を紹介。



富士フイルム、新CTPを出展

▼Agfaは、新製品の：Advantage N セッター (75～350版/時)とケミカルフリー・バイオレットプレート：N94-VCFと新製品の：Attiroクリーンアップユニット、HTML5ベースのプロダクションワークフロー：Arkitektの新バージョンを紹介。▼Kodakは、サーマルセッターTrendsetter Newsと自動ローディング機能及びプロセスフリープレート Sonora Newsを紹介。▼Kurauseは、バイオレットセッターLS Jet Multifomat (最大400版/時)とワークフローJet Netの最新バージョンを出展。▼東レは、昨年10月から本格生産しているチェコ新工場の「水なし版」と印刷紙面を出展し話題となった。

■**オフセット輪転機**：KBA、manroland web systemsとも記者会見で「世界のオフセット輪転機の新規発注金額は2006年のピーク時に比べ2013年は相当落ち込み、低迷している」と説明。各社とも実機展示はなかったが、新興国向けコンパクト輪転機や周辺機器などの新たな取り組みを紹介した。▼KBAはコンパクトオフ輪Commander CT/Cortina (水なし)の納入状況、特殊印刷例(パノラマ、ハーフカバー)、新デジタル印刷機RotaJET L シリーズ及びHPとの「段ボール包装印刷向けインクジェット印刷機」の共同開発などを紹介した。▼manroland web systemsは、新聞・商業オフ輪の最新納入実績、インドや中国向け新製品のコンパクト機CROMOMAN4×1、輪転機自動制御ソリューションPECOM-X (レベル1～5まで段階的開発)、オフセット輪転機とデジタル印刷機の連携融合化、デジタル印刷機向け後加工機FormeLine (書籍用)、FoldLine (新聞用)をビデオ紹介。実機として新開発のControlCenterとタブレット端末による印刷状況表示と操作を実演。▼Goss internationalは、2×1コンパクト輪転機MagnumCompactによる多品種小ロット印刷、自動版交換による迅速なジョブチェンジ、ヒートセット付加によるマルチプロダクト印刷な

どをビデオ紹介。会期中にコロomboの新聞社にアジア初の受注を発表。▼WIFAG-Poltypeは、プラスチックやアルミホイルなどのデジタル印刷への取り組みと印刷オートメーションなどについて紹介。

■**デジタル印刷機**：昨年からわが国、欧米で新聞デジタル印刷機の導入が活発化し、さらに後加工機含めた新製品の開発も進んだことで、主要ベンダーが一堂に出展し盛況となった。全体的に高速化(150~200m/分)、高品質化(600~1200dpi)、幅広化(KBA RotaJet Lシリーズは最大1300mm)と後加工機とのインライン化などの進展が見られた。▼**富士フイルム**は、デジタル印刷機JetPress540Wの印刷サンプルを展示。英国の商業印刷会社で稼働中と紹介。▼**キヤノンOce**は、新聞向けデジタル印刷機として「ColorStreamシリーズ」と「JetStreamシリーズ」をビデオ紹介し、導入新聞社・印刷会社の紙面サンプルを展示。わが国では朝日新聞社が10月にColorStream3700Zを業界初導入した。▼**Kodak**は、世界最速のデジタル印刷機Prosper6000Pのビデオ紹介と印刷サンプルを展示し、高生産性と高品質を紹介。また、中日新聞社で稼働しているハイブリッド印刷向けインプリンティングシステムProsoerSシリーズのビデオ紹介と印刷サンプルを展示し、世界各地で導入進展を説明。▼**KBA**は、新製品RotaJET Lシリーズを初めて発表した。従来機のRotaJET76を大幅にグレードアップし、「新聞、書籍、ダイレクトメール、包装、商業印刷」向けを紹介。おもな仕様として、「モジュラー設計により5モデル提供」、「モノクロからフルカラー対応」、「印刷幅は895mmから最大1300mm」にヘッド追加で可能。京セラヘッドを採用し水性インクにより解像度は600×600dpi、印刷速度は150m/分と説明。▼**manroland web systems**は、新聞用後加工システムFoldLineの1号機がイタリアのRotolito Lombarda社、書籍用後加工システムFormerLineが中国で5

式、ドイツで1式稼働を紹介。▼**Hunkeler**は、新聞用後加工システムをビデオ、パンフレットで紹介。わが国では朝日新聞社がColorStreamともにHunkeler製POPP7を業界初導入した。

■**ポストプレス**：オフセット輪転機と同じく実機展示はなかったが、取り巻く環境変化に対応して、主要ベンダーから「コンパクト付加価値発送システム」が出展され、おもに「新しい付加サービス、高速化、オープン化、コストパフォーマンス向上」などが紹介された。▼**Ferag**は、EasySertによる各種印刷物の本紙への容易な挿入やダイレクトマーケティングへの活用、TapeFixによる各種印刷物のバインディング、ドラム・ライン・クリッパーSNT-50、高機能コンベアーHPC、高機能スタッカーHPSとNabigtorによるメイルルーム管理の容易化、効率化を紹介した。▼**MÜLLERMARTINI**は、新製品NewsGrip Fによる最大10万部の高速化、効率的な新聞搬送と費用対効果の向上、Connexによる発送部門の効率化とオープン化を紹介し注目を集めた。▼**Q.I.Press Controls**は、買収したEAEと共同開発したIDS-3Dカメラシステムを初出展。従来のデュアルセンサーMRC-3Dシステムをベースに、新しい品質オートメーション機能を付加してレジスタ機能と濃度制御をオールインワンで実現と紹介した。

おわりに

以上、欧米の厳しい新聞メディア環境の中、規模縮小ながら開催されたWPE14の概要をレポートした。ユーザー・ベンダーが密接に連携し、多様なシステムやソリューションが一堂に出展・紹介され新たな時代の到来を予感した。

わが国では来年7月に3年ぶりにJANPS2015が開催されることになり、次世代に向けた新聞製作ソリューションの出展を関係各位のご尽力により期待したい。

新局長に就任して

現場とともに

信濃毎日新聞社 印刷局長

宮沢 秀紀

初任地のサツ回りから、整理部に異動した。数年後だったか、デスクに命じられ、本社にあった印刷工場に走った。「(輪転機を)止めてください」と叫んだ。いっこうに止まらない。「止めろって言ってるじゃねえか」と怒鳴ったら、「こっちにも都合があるんだ」と怒鳴り返された。止めた理由はさっぱり忘れたが、騒音が消えた工場の気まずさは忘れない。



あれから30年。「こっちの都合」が分かる身になった。

輪転機を止める事態は、よほどのことだ。降版後に紙面を取り直したことは何度とある。整理部面担として、デスクとして、松本報道部デスクとして、支社長として。版替え停止のロス、挽回できていただろうか。

整理部長の時、夕方に共同通信の大震災出稿メモをみて、特集2ページを増やしたことがある。工場では巻き取りの用意から、仕立て、準備のやり直しだ。今は大変さが分かる。

自社の特ダネがあって追い版を取り、地元の県南分に「できれば」入れてくれ、と無理を言った。トラックから早版を下して積み替えた、と当時の責任者から最近になって聞いた。

やれやれ。ずっと苦労を掛けてきた。毎晩、安定稼働に身を粉にしているのが印刷現場だ。その中で、「やってやるぜ」と意気込む声が聞こえそうな、新聞人らしい働きぶり。仲間になって、あらためて頼もしく、誇らしく思う。

印刷局に移り、先の3年余は塩尻製作センター長を務めた。輪転機の清掃や刷版の装着と取り外し、朝刊準備のページをやってみた。もちろん輪転機は動かせない。大事なところは触らないのが肝心だ。夜勤班にも加わった。この深夜勤の繰り返しは、中年以降つらいだろうな。

発送もセンターの仕事だ。主な路線のトラックに同乗した。真っ暗な山道の疾走は、まるでジェットコースターだ。センターを出て4時間、明け方に着いた最終の販売店は、従業員が道路に出てトラックを待ち構え、争うように開梱が始まった。

* *

10月の人事で、長野製作センター長兼務の印刷局長に着任した。社内の同僚も業者の皆さんも、「重責だね」「大変ですね」と声を掛けてくれる。そうだと思う。

印面、体裁、機械の不調…。毎日毎晩、何がしかのトラブルや、気を張る調整があり、何とかしのいで新聞を出す。何があっても紙齢は絶やせない。何かがありそうで、現実に「3.11」があったわけで、考え過ぎると眠れないほど。普通に毎晩寝ているけれど。

幸い、長野と塩尻、両製作センターとも、腕の立つ40代の印刷部長、発送部長らが現場を仕切っている。任せておけば心配ない。印刷生え抜きの前局長は、相談相手になって隣に居てくれる。恵まれたスタートだ。

工場では、息子より若い少年たちが、作業服をインキや紙粉で汚し、緊張した顔つきで輪転機に向かっている。来春も高卒の新入社員が入ってくる。

これから40年。この子たちが定年まで、充実した信毎人生を送ってほしいと願う。

そのためにも、わが印刷局の課題は何か。何を手掛け、どの方向に進むべきなのか。部長らと議論を始めたところだ。現場と一緒に、じっくり考えて、針路を見出そう。

楽事万歳

余市追想

共同通信社 常務理事

小野江 公利

北海道余市町。積丹半島の付け根にあるこの町のシンボルは、ニッカウキスキー余市蒸留所のがっしりとした石造りの門と、その奥に見える赤いとんがり屋根の塔(キルン塔)だ。

今年10月から始まったNHKドラマ「マッサン」の舞台となるこの蒸留所は、1934年にドラマの主人公・竹鶴政孝が創業した。JR余市駅から蒸留所に延びる道は、竹鶴の妻リタの名前を冠して「リタロード」と呼ばれ、地元の人たちが沿道に花を植えて訪れる人たちの目を楽しませている。

この地は、ウイスキーの原料となる大麦の入手が容易で、後背地にはウイスキー作りに欠かせない豊かな水やピート(泥炭)、石炭もふんだんにある。何より、冷涼で湿潤な気候は、ウイスキー作りの本場スコットランドに似る。

*

*

札幌支社在勤中の2007年、この余市蒸留所で開かれた1泊2日の「マイウイスキーづくり」のイベントに参加した。マイウイスキーづくりは、大麦の燻蒸からポットスチル(蒸留釜)への石炭火入れ、たる作り、原酒のたる詰めなど、ウイスキー作りの一連の工程を少しずつ体験できる。この時たる詰めした「マイウイスキー」は、10年後の開栓を待って今も蒸留所の倉庫で熟成を続けている。

イベントには全国から私を含めて16人が参加した。私は、札幌勤務の記念にと、何度か抽選に応募して4回目でやっと当選した。参加者は、婚約を記念して和歌山から参加したカップルやウイスキーが好きで長崎から来た大学生など、年齢も職業もさまざま。この中でとりわけ印象深かったのは、大阪から参加

した男性Aさんだった。

Aさんは70歳を超える年齢ながら、ハードな肉体作業を淡々とこなした。1日目の夜に蒸留所内のレストランで懇親会があり、一緒に極上のシングルモルトウイスキーを味わった。

Aさんはグラスの半分ほどに満たした冷水の上にウイスキーを静かに注いだ。水よりも比重の軽いウイスキーが、上方に琥珀(こはく)色の層を作った。慎重にすすったAさんは「これがおいしい水割りの飲み方なんや」と、頬を緩めた。



Aさんは、大阪にある会社で役員を務め、定年を迎えた。かねて憧れていた余市でのマイウイスキー作りに参加しようと、定年になるのを心待ちにしていたが、関連会社の社長になるよう頼まれ、断りきれずに引き受けてしまった。それから約10年。社長を辞め自由の身になって、やっと夢を実現できるようになったという。

大阪から舞鶴に出て、フェリーに乗って余市の隣町・小樽に上陸した。海から霧に包まれた余市を見たかったからだという。

ウイスキー作りの最後には、自分たちの原酒を詰めたたるに、それぞれの名前を書き込み、10年後の再会を誓い合った。

Aさんは、たるを空ける2017年には80歳を超える。一つのたるで熟成した「シングルカスクウイスキー」で再会の乾杯ができるだろうか。マッサンのドラマを見ながら、3年後の再会を楽しみにしている。

わが職場

雪と暮らす

東奥日報社 システム局システム部長 加福孝

青森市は人口30万クラスとしては世界一の豪雪都市とも言われます。長い冬はなかなか厳しく、住み慣れた私たちも、時に悲鳴を上げます。ちなみに、ここ20年間の積算降雪量平均は678センチ。豪雪の街を証明しています。弊社は市中心部から南側の郊外にあります。その南方には八甲田山が立ち上がり、ふもとに大雪を降らせるのです。

一方で厳しい冬は、“雪の恩恵”をももたらします。青森市の水道水は以前、国の「日本一おいしい水」に選ばれました。リンゴや野菜など農作物、ホタテやヒラメなど豊かな魚介類も八甲田や岩木山、白神山地に降り積もる雪の恵みです。

津軽の厳寒の中を激しい風が吹き付け、舞い上がった雪が視界を覆う地吹雪を体験するツアーも、海外からのお客さんも含めて人気です。また、県内と東京のIT企業が、下北地域に建設予定のデータセンターは、冬場の雪を冷房に使う「雪氷冷房」で、電力コストの削減を図る計画です。「利雪」「克雪」「親雪」の取り組みや工夫が、ますます進むことを願っています。

電力コストといえば、共同通信の共有システムに昨年9月から移行した弊社は、省エネにも多少の手ごたえを感じています。新聞制作システムのラックが7本から1本に減ったことで、マシン室空調の消費電力を大幅に減らすことができました。共有システムのトップバッターとして、システム進化の責任を果たしながら、自然環境に気配りした新聞制作を心がけていきたいと思います。

現場密着でより高品質をより安く

株日経東京製作センター 製作技術部長 加茂 信喜

日本経済新聞社の中核印刷工場を管理運営する日経東京製作センターは再開業の著しいウォーターフロント、東京・江東区の東雲工場に本社機能を設けています。東京湾に注ぐ辰巳運河に隣接、周囲に水辺公園が整備されて超高層マンションが林立、大型ショッピング施設もあり、もともと工場施設を建てた25年前とは様変わりの最先端風景です。

日経新聞から分社化したのが2004年11月ですから、当社は創立10周年を迎えることになるわけですが、実は製作技術部は発足3年目で、いまだ周囲に存在が浸透しているとはいえません。知名度不足を強調すると、お蔭様で、このように原稿依頼が回ってきます。

より現場に密着して様々な現場サポートを進める趣旨で日経本社製作局技術部から要員を割いて発足、東雲工場を拠点にしていますが、首都圏、大阪、名古屋、福岡にある日経直営12工場が職場になります。日経本社製作局から委託された業務は、日経グループ各印刷会社の予算計画の立案、現有設備の不具合サポート、設備・資材の開発など多岐に渡り、要は安定した新聞発行と品質向上のために日々奮闘しています。

例えば川崎工場での自治体広報紙印刷に絡み、自治体編集者が使うインフラの整備、上質紙を使った印刷テスト、自製のオンライン宛名札作成ツールの導入などで現場をサポートしました。もちろん自治体ははじめ非本社媒体の扱いとしては、後発参入組です。同業他社の先達の皆さんをお手本に、今後も品質、コスト面双方で臨機応変に取り組みます。

第114回技術懇談会記

CONPT-TOUR2014報告会開く

米国視察を終え帰国した今年のツアー報告会(第114回技術懇談会)を、11月14日(金)午後3時からプレスセンター内で開いた。37名という近年にない多くの参加者があった視察報告とあって、この日も新聞社関係50人超、会員社30人超のほか講師、新聞協会、事務局を含め約100名が出席する大盛況の会合となった。



米国訪問は7年ぶり、目玉は新聞界で関心の高まるデジタル印刷のビジネスモデル探求。その他にもNYタイムズ本社、同工場、NYデイリーニューズ工場、シカゴトリビューン工場の視察に加え、GRAPH EXPOの見学もある6泊8日の盛り沢山な内容だった。報告会はずまず芝則之会長の挨拶、桑江暢也団長の総括の後、林克美氏(インテック)がNYタイムズ社の見学結果を披露。次いで岩川勇人氏(日経首都圏印刷)が大手紙3工場を、黒澤勇氏(共同通信)がEXPOレポートを行った。最後に増田晴樹氏(静岡新聞)がシカゴのTopweb社、ホノルルのハワイ報知社のデジタル印刷の実状を報告した。2時間通しのレクチャーだったが、聴衆の熱心な姿勢が目立った。

報告終了後会場を「アラスカ」に移し懇親会を開き、70名を超える出席者が1時間半にわたって歓談した。報告会、懇親会とも平井泰之クラブ委員長が司会進行を務めた。

(事務局)

新潟で第67回新聞大会開く

新聞大会は10月15日午後、21年ぶり新潟市で開かれ新聞界の幹部ら約490人が参加した。CONPT関係者は芝会長、矢森評議員とマネジャー 徳永の3人が出席した。大会では昨年に続き、「新聞への軽減税率適用を求める」特別決議が満場一致で採択された。協会賞は技術部門「クラウド活用による日経NEOの構築」を含む8件を表彰した。

新聞社社長をパネリストに恒例の研究座談会があった。冒頭、朝日新聞木村社長が、新聞界の信用を大きく損なったと誤報問題を謝罪した。ついで注目の消費税10%時の新聞の扱いについて議論、(この号が出るまでに増税先送りの結論が出たが)在京紙、地方紙社長らの見解が披露された。まず長谷部協会税制プロジェクトチーム座長から、与党税調は軽減税率の制度設計を進めるはずと報告した。高士氏(神戸)は契約更新時に購読をやめる人が増えているとし、小田氏(新潟日報)は新聞の重要性と必要性は意味が違うので、別個に訴えながら軽減税率を理解してもらう必要がある。朝比奈氏(毎日)は、国会議員、地方議員への働きかけを進め新聞界の結束を固める。木村氏(朝日)は10%になるときは読者の反応が一層厳しくなる。最後に白石協会長(読売)が、与党税調幹部には新聞の軽減税率に抵抗感がある。書籍出版も含めて5%に引き下げよう結束し努力する——と議論をまとめた。

(事務局)

会員消息

■担当者変更

*コダック(合)(10月28日付)

[新]久米 邦雄氏(情報コミュニケーション
営業本部報道メディア営業部部長)

[旧]馬場 秀樹氏(情報コミュニケーション
営業本部報道メディア営業部担当部長)